

聖書:列王記第二章22～37節

説教:主は見届ける(2)

はじめに

いつものように前回までのあらすじを振り返ってから今日の所を見てまいります。今からおよそ二千八百年前、預言者エリヤが活躍していたことのこと。当時、北イスラエルの王であったアハブは、自分の家のすぐ隣にあるぶどう畑が欲しくなり、畑の持ち主であったナボテと交渉するのですが、先祖が神からの約束の地として譲り受けた土地を、たとえ王であろうとも売りわたすことなどあり得ないと言って、堅く断ってしまいます。これを知ったアハブの妻イゼベルは、無実の罪をナボテに着せて合法的に殺し、強引に畑を手に入れてしまう。それからおよそ三十年が経ち、ナボテの畑事件が世間から忘れ去られたかに見えたとき、事態は動き出します。当時の北イスラエルの王であったヨラムが戦争で負傷し、宮殿のあるイズレエルで療養していたこと。預言者エリヤは、主の命令によってエフーに油を注ぎ、北イスラエルの王として指名すると、エフーは直ちに兵を挙げてイズレエルに馬を走らせます。ヨラムはそんなことなどまったく知らずに、このことエフーを迎えに出ていき、二人はナボテの畑で落ち合います。そこで何が起きたのかは、いま司会者に読んでいただいたとおりで、なんとも目を覆いたくなるような光景が繰り広げられていきます。ここにどのような神の恵みがあるのかを考えてまいります。

1 エフーの信仰

1) 姦淫と呪術が盛んに行われている

何も知らないヨラムは「エフー、元気か」と尋ねます。そうするエフーはこう答える。「何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術が盛んに行われているのに。」

エフーの返事に着目します。エフーが、この世の権力や名誉だけを追うような人物であったらこんなことは言わないでしょう。「残念だったなヨラム。次の王は私だ。」とかなんとか言ってヨラムを倒す。ところがエフーは、この国で姦淫と呪術が盛んに行われていることに心を痛めていると言うのです。彼は、目に見えない霊的な世界を見ていて、姦淫と呪術が止まない限り、自分には平安はない。そう言っている。これがエフーの信仰だった。彼の信仰については、次のことによっても知ることができます。

2) エリヤのことばを記憶する (列王記第一21章)

ヨラムが倒れたのを見てエフーは侍従のビデカルにこう命じます。25節前半。「彼を運んで、イズレエル人ナボテの所有地であった畑に投げ捨てよ。」なぜ畑に投げ捨てるのか。その理由はこうです。25節後半から26節。「思い起こすがよい。私とあなたが馬に乗って彼の父アハブの後に並んで従って行ったときに、主が彼についてこの宣告を下されたことを。『わたしは、昨日、ナボテの血とその子たちの血を確かに見届けた——主のことば——。わたしは、この地所であなたに報復する——主のことば。』それで今、彼を運んで、主が語られたとおり、あの地所に彼を投げ捨てよ。」

「私とあなたが馬に乗って彼の父アハブの後を並んで従って行ったとき」とは、いつのことか。突然出てくるのでびっくりしますが、おそらく列王記第一21章19節のことだろうと考えられます。ヨラムの父アハブがナボテが死んだと聞いて、畑を取り上げようと道を急いでいるときのこと。向こうから預言者エリヤが現れ、アハブにこう告げる。「主はこう言われる。あなたは人殺しをしたうえに、奪い取ったのか。犬たちがナボテの血をなめた、その場所で、その犬たちがあなたの血をなめる。」この場面にはエリヤとアハブのことだけが記されていますが、実はその後ろにエフーとビデカルもいた。エフーはその時、エリヤのことばを印象深く記憶する。それから三十年経ち、あのときのエリヤのことばは、いままにこのことだったのだと理解する。ことばで言えば簡単ですが、エフーに霊的な洞察力がなかったならこうはいかない。主がエフーを北イスラエルの王に任命したのも、ちゃんと理由があったのです。

2 イゼベル

1) 「主君殺しのジムリ」

さて、ヨラムを倒したエフーは、続いてイゼベルのところに向かいます。その時の様子が30、31節。「エフーがイズレエルに来たとき、イゼベルはこれを聞いて、目の縁を塗り、髪を結び直して、窓から見下ろしていた。エフーが門に入って来たので、彼女は「お元気ですか。主君殺しのジムリ」と言った。」

ジムリとは、主人を裏切って北イスラエルの第五代目の王となった人。つまりイゼベルは、自分の息子ヨラムが倒れことをエフーが来る前にすでに知っていたということを示します。イゼベルは当然、次は自分だということを悟る。それで髪を結び直して、死に化粧をした。研究者たちはそのように説明しています。悪いことをしたけれど、女王として最期は桜が散るように散ろうとしたのか。日本人ならそう思うのでしょうか。でも、聖書はイスラエルの歴史をおもしろおかしく書いてある読み物ではありません。あくまでも、人の罪と、その罪から救おうとされる神のことについて書かれたものです。ならば、イゼベルのとった態度について、もっと別の角度から考えるべきではないのか。そのことはまた後で触れたいと思います。

2) 犬がイゼベルの肉を喰らう

エフーがイゼベルにしたことは書かれているとおりです。イゼベルのなきがらは一晩城壁の外に放置されたままにされました。ユダの王アハズヤが丁寧に葬られたのと比べると、その違いは明らかです。翌朝、エフーの部下が行ってみると頭の骨と両足と両手首しか残っていない。夜の間には犬や獣がやって来たのでしょう。報告を受けたエフーはこう言います。36, 37節。「これは、主がそのしもベティシュベ人エリヤによって語られたことばのとおりだ。『イズレエルの地所で犬がイゼベルの肉を食らい、イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑の上にまかれた肥やしのようになり、だれもこれがイゼベルだと言えなくなる。』」

ここは普通、イゼベルの悪口をさんざん言いながら勝利を祝うところでしょう。ところがエフーは、主が語られたことばを思い起こしながら、目の前の現実を理解しようとする態度があつて、ここにもエフーの信仰が表されています。

3 神

1) 見届ける

26節にこうありました。「わたしは、昨日、ナボテの血とその子たちの血を確かに見届けた——主のことば——。わたしは、この地所であなたに報復する——主のことば。」

「確かに見届けた。」それはただ見ましたという意味ではありません。そこで行われた悪に対して神は何年経っても覚えていて必ず報復する、罪をさばくという意味です。その結果、ナボテの畑事件から三十年経って、ヨラムはエフーが射った矢で倒れ、イゼベルは城壁の窓から突き落とされて死んで

いく。こうしてエリヤが預言したとおりのことが成就しました。神が語られたみことばに偽りはない。それはわかります。

2) 思い直す

しかしもう一つのことを考えたい。今言ったことに反するようですが、神のことばは一度語ったら絶対に変更されないのでしょうか。思い直すということはないのでしょうか。ヨラムとイゼベルは、神が語ったとおりにさばかれたのだから、神が一度語ったことばは絶対に変更されない。そんな結論で終わりそうです。

では、前回も触れましたがアハブはどうだったのでしょうか。アハブも妻のイゼベルと一緒にナボテを殺し、畑を取り上げた人物です。神もさばかれる人物リストにアハブもはっきりと挙げていた。では、そのアハブはどうなったか。さばかれませんでした。アハブが自分の罪を認めて悔いたからです。そのとき神はこう告げた。「あなたは、アハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。彼がわたしの前にへりくだっているの、彼の生きている間はわざわいを下さない。」こうして彼は救われました。神は一度語ったさばきのことばでも、思い直すことがあることを示します。

3) 悔いる者を救う

このことをイゼベルに当てはめたらどうなるか。エフーがやって来たとき、イゼベルの前にはどのような道が残されていたのか。もう自分は殺されるだけ。そのような一つの道しか見えていなかった。ところが、主の目には違った。実はもう一つ、逃れの道が残されていた。アハブは罪を示されたとき、自分の衣を裂き、粗布をまとって罪を悔いた。同じようにイゼベルの前にそんな道がちゃんとあつて、それを選ぶことができた。ところがどこまでも邪悪なイゼベルは、エフーに「主君殺しのジムリ」と呼びかけ、衣を裂くどころか、むしろ化粧をし、髪を整え、女王としてのプライドだけは一人前で、絶対に罪を認めず、傲然と主に背き続けていった。その結果、ここに書かれているとおりのことが起きた。

でもどうでしょうか。アハブが赦されたことでさえ納得できないのに、イゼベルも救われる可能性があつたと聞いてどう思いますか。「話にならない。ナボテはどうなるのか。もしイゼベルが赦されならナボテはとて浮かばれないイゼベルがこんなめにあつて当然」。そう思うのでしょうか。

4) イエス・キリスト

もう一度26節を読みます。「わたしは、昨日、ナボテの血とその子たちの血を確かに見届けた——主のことば——。わたしは、この地所であなたに報復する——主のことば。」見届けるとは、何年経っても覚えて必ず報復をするという意味だと先ほど言いました。それに加えてもう一つ意味がある。ナボテとその家族は殺されました。この人たちのいのちはどうなるのか。たとえイゼベルに報復をしたとしても、彼らのいのちが回復されなければ、「無念を晴らした」くらいの意味しかない。それだったら、たんなる仇討ちと変わらない。

神が見届けると語るとき、そんな安っぽい意味ではない。人の罪は必ずさばくという意味と同時に、失われたいのちを取り戻していく。その両方を含みます。見届ける神であることを、私たちの目がはっきりと見えるようにと示してくださったのが、イエス・キリストの十字架です。そこには二つの教えがありました。一つ目。神のひとり子が私たちの罪を背負われたとき、父なる神はひとり子をさばかれました。神は人の罪を必ずさばかずにはおかない。これが一つ目。そしてもう一つ。罪を悔いる者を神は赦し、私たちが失ってしまったものをすべて回復してくださり、滅びることのないいのちを与えてくださる。たとえイゼベルのような者でさえ、罪を悔いるなら赦そうと待っておられる神。それが十字架です。

この十字架のイエスを信じながら、また新たな一週間を歩んでまいります。